
神々の黄昏（ラグナロク）

杜神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の黄昏
ラゲナロク

【Nコード】

N7338I

【作者名】

杜神

【あらすじ】

「神」は「人」を「神」の「像」かたちに創られた。

然し、「人」は、自らの意思により「神」から離れる。

其れにより、「人」は自らに「罪」を呼び、「死」を招く。

苦しみが覆い、悲しみが満ちていく。

「人」は、再び、「神」を見出せるのであろうか。

「神」は、見届ける為に、「季」ももとして降り立つ。

「終わり」が来る前に気付き得るのか……。

「答え」はまだ見えていない……。

第一話 プロローグ（前書き）

この作品は、「もしも」的な要素が強い作品です。

歴史であった事実を、作者の独自解釈で加工してあります。

故に、歴史的事実とは異なる出来事や、脚色されていたり、改変されている事柄が多々あります。

そう言う事を踏まえて、お楽しみになって下さいませ。

尚、思想や宗教色が強い描写もある為、その様なものが苦手な方は

ご遠慮して下さいませ。

それでは、お楽しみ下さい。

先ずは、プロローグからです。

第一話 プロローグ

小説 ラヴノロク 神々の黄昏

第一話 プロローグ

我は、初めが無く終わりが無い者。

我は、全てを創りし者。

我の故に全ては存在し、又存在を許される。

全ての存在は、我の為にあり。

しかし、我は其れを、強制はせず、存在の意志に任せる事にした。

故に、我は傍観者と為る。

そう、眺める者と為るのだ。

永久にたゆたいし時の流れの中で、いや、その時ですら我が作りだした物に過ぎないのだがな。

先ずは見ていくとしよう。

我の「像」かたちに作り上げた「人間」達を。

初め、

神は、「天」と「地」を創られた。

神は、「光」あれと言われた。すると、「其の様に」為った。

神は、「水」の間に、「空」を創られた。

神は、「地」の上の水を分けて「地」と「海」を創られた。

神は、「地」の上に「草木」を生え出させた。其の種類に従って。

神は、「天」の光を見える「光体」として示され、大きな方があるときは「昼」と、其れが、無いときにも小さな方があり昼でない方を「夜」と呼ばれた。

神は、水に住む生き物を、また、空に住む飛ぶ生き物を、其の種類に従って創られた。

神は、「地」に住む、家畜と野獣、又、動くあらゆる生き物を、其の種類に従って創られた。

神は、自分に似た様に、そう、神の像に「人間」を創られた。

最初、創り上げた「それら」は、非常に「良かった」。

(聖書。創世記の書、より、要約する形で抜粋。)

そう、初めは其れで良かった。しかし、「神」の「像」である人は、自分で決定できる能力を持つが故に、用い方を誤れば諸刃の剣と為りかねなかった。其れでも、我は、人を創り出した。己の意思で「神」を敬う者を創り出した故に。しかし、其処を利用する者が、我が創り出した者から現れたのだ。我ではなく、「自ら」を崇拜して貰おうと、そうさせないとしても、「神」に「自分の意思で」反逆させようとして。

其れは、自ら「悪魔」に為った。「人」の心に、猜疑を植え、自尊心を高ぶらせ、「神」に従うよりも、愚かにも、自分で決定した方が有益に為ると「嘘」を言つて。

自ら決定出来る「人」は、愚かにも、其の決定を下してしまふ。其れにより、彼等は、自分達では如何しようも出来ない事柄迄、決定をしなければ為らない事に為り、自らを苦悶の日々へ追いやる事に為つて行く。

「人」の誤つた決定は「罪」を生み出した。其の、結果は「死」である。しかし、彼らは其れを受け入れられなかった。故に、我から離れ、己に都合の良い「神々」を作り出し、無駄にも、其れに屈め始めるのであった。

悲しき定めの人々よ。「虚無」に服さざるを得ない「人間」よ。

我は暫し「傍観」しよう。「助け手」は差し伸べる。しかし、御前達が気づくかどうか……。自ら、我から離れ出た故に。

さあ、如何振舞うかを見てみようか。

此れは、我が書き留める、徒然なる物語の一端に過ぎない。愚かなる人間達。早く、我の事を気付ける様に。

そう、「終わり」が来る前に。

第一話 プロローグ（後書き）

短いですが、これがプロローグと為ります。

次回から主人公である、李^{もも}が登場致します。

彼女が如何立ち回り、関与していくか。

其の辺りを楽しんで頂ければ幸いです。

其れでは又。

「終わり」が来る前に、「神」に気付く事が出来ます様に。

第二話 濃姫（織田帰蝶）（前書き）

今回は、織田信長の正室、帰蝶（濃姫）が主役として出て参ります。

文献的記録が少なく、謎が多い人物としても有名な方です。
作者の独自解釈で、物語を描きました。

楽しんで頂ければ幸いです。
其れではござぞ。

第二話 濃姫（織田歸蝶）

小説 神々の黄昏
ラグナロク

第二話 濃姫（織田歸蝶）

場所は日本。時は戦国時代。当時は尾張と呼ばれていた場所に、織田信長と言う大名が居た。彼は尾張一國を漸く平定し、其の安定化に勤しんでいる処であった。彼には正室（正当な第一位の立場の妻）として歸蝶と言う女が居た。美濃の齊藤道三の娘で、故に濃姫とも呼ばれていた。

場面は、信長が住む屋敷、歸蝶が休んでおり、ふと縁側で溜息を吐いているシーンから入る事に為る。時は巳の刻辺り（午前十時頃）朝の仕事が終わり、漸く一時が、と言う時間帯であった。

「はあ……。」

歸蝶は溜息を吐いていた。織田家に輿を入れてから数年、一体幾つに為っただろうか。と、ふと考える。夫である織田信長は、自分の事を女としてすっかり愛してくれ、不満は無い。しかし、大名の妻として輿入れをしたのであるからには、女としてのもう一つの務めが果たしたかった。そう、子を産み育てると言う務めを。しかし、夫に愛して貰っているにも拘らず歸蝶は子供に恵まれていなかった。要するに、妬うらやまなのである。子を宿うす事が義務ともされていたこの時代において、其れは精神的に負担と為っていた。

「はあ……。私は、夫に恩を返せないのでしょうか……。」

再び溜息を吐く。其れを見て、其処で働く女の一人が言う。

「帰蝶様……。殿に、愛されて、御幸せに為らなければ、逆に殿に申し訳が無いと思えます。」

正論とも言える事をその女は述べる。しかし、やはり、女、いや、嫁いだ妻としての矜持を堅持したい者としては、只の愛される女以上の事がしたいのだ、と焦っていた。帰蝶は、

「分かつてはいるのですよ。其れでも、妻として、やり尽くしたい事が出来ない事が口惜しいのです。」

再び溜息を込めて、そう語り縁側から見える、池のある庭を眺めていた。女は、軽く溜息を吐き、自分の仕事に戻っていく。暫く帰蝶はそうやってぼんやりと庭を眺めていた。

「楽しまずに、そうやって、只、見ているだけでは、込められた「思い」や「目的」は見えぬものだぞ。」

ふと、そんな声が聞こえて来た。帰蝶は声の方に振り向く。其処には、腰よりも長い、美しい漆黒の髪の毛、そう、まるで人形を其の俤人に置き換えたかの様な、可愛い女の子が立っていた。

此処は、大名が住む屋敷の奥である。警備も厳しく、不要に人が入る事は、余程の事が無い限りあり得ない。言い換えるなら、そう言う者が居るなら、忍び等の尋常ならざる者か、大名家縁の人物である筈だった。しかし、如何見ても、此の子が忍びとは思えない。大名家縁の者にも、知り合いの者に、今見ている者は居なかった。一体どうやってこの者は此処に現れたのであるのか？帰蝶はそう考えていた。

「ふむ。立場と言うものは面倒なものだな。そうやって、考えなくても良い事を考えなくては為らぬとはな。其方を安心させる為に自己紹介でもしようか。」

まるで帰蝶の考える事が分かるが如く、其の子供らしい存在はそう言った。帰蝶は驚きつつ、其れを見ていた。其の子供は言う。

「我の名は李もてと言う。帰蝶、であったな。初めてお目に掛かる。我は、「人」を眺めて旅をする者。御前に興味があつて、今回はこうして現れたのじゃ。」

その言い様に、帰蝶は呆然としていた。姿は子供の様であるのに、其の話し方には「威厳」があり、下手な僧正よりも「権威」があつた。

「如何した？我は、我が来た理由を述べたぞ。今度は、其方そなたの方が述べる番じゃ。」

李もてと言つた者は、そう言った。其の物言いですら、淡々としていたのに、ハッキリと言い含める「何か」があつた。ハツと為り、帰蝶が答える。

「あ、ああ……御免なさいね。ちよつと、思いに耽つていたものだから。妻として此の家に嫁いだのに、女以上の恩返しが出来ないのが辛くて……。」

初めて出会つた李もてに対して、帰蝶は自分の思いをそうやって吐露していた。傍から見れば異様な光景であつたかもしれない。大名の妻が、子供に愚痴を言っている様にも見えるからだ。然し、其処には二人しか居らず、帰蝶は静かに自分の思いを語っていた。李もてが答

える様に、

「ふむ。言いたい事は分かるが……帰蝶。御主は、只、義務として夫に返したい、そう思っているのか？」

そう言った。その疑問に帰蝶は、

「そんな事はありません。夫を愛するが故に、より喜んで頂きたいが故にそう思うのですわ。でも……。」

そう言いかけて止まる。其れに続く様に李が、

「子を宿す事は叶わぬ。と、言うのじゃな。」

そう言った。其の言葉に、ハツとして帰蝶は李を見た。李は帰蝶を見ながら微笑み、

「焦る御主の気持ちも分からぬ訳ではないがな、帰蝶。夫である信長は、御主を愛しており、又其れを御主は分かっているのであるろう？」

そう言う。帰蝶は頷いて其れを肯定した。其れを見て李は更に、

「そうであるならば、妬である現実を哀れむよりも、良き夫の良き妻としての責務を考えて行動をした方が、夫である信長も御前を更に喜び、妻として、女として、そして「人」として高めるのではないか？」

そう言うのであった。そう言われて、帰蝶は考え込む。そう、最近、自分は何をしてきたのであろうか。自分の状態を憂い哀しむ事

はしていても妻として何をして来た？そう考えてから、

「そうですわね。確かに、李ももの言う通りですわ。自身の状態を哀れんだとしても、其れは自己満足であって夫や家の為には為りませんわ。私自身が私だけを可愛がっている様なものですわね。」

帰蝶はそう言った。李ももは笑顔を表しながら、

「其れでこそ、「螻まじ」殿の娘である、帰蝶だな。奴も喜ぶであろう。」

そう言った。帰蝶は驚いて、

「御父様をご存知なのですか？李ももさん。」

そう言う。李ももは答えて、

「奴が油売りをしていた頃からの知り合いだ。又会うとしよう、帰蝶。御前が如何するか楽しみに見ているぞ。」

そう言った。其れを聞いた後で、帰蝶は李ももの姿が見えなくなった。周囲を見回すが、誰も居ない。

「今のは一体……。此れは？」

帰蝶はそう言い、足元に落ちていた物を拾う。其れは、小さな紙切れだった。其処には、「李もも」とだけ書かれていた。其れを手に持って、帰蝶は、

「そうですわね。出来うる限り頑張ってみますわ、李ももさん。」

そう決意を込めて言うのであった。

(時は幾らか経ち、織田信長が美濃を平定し、息子信忠を、帰蝶の養子として嫡子とした後に、美濃の稲葉山にて)

山城である稲葉山城は、周囲が良く見渡せ、景色が非常に良かった。帰蝶は、今日も日々のこなすべき仕事をしながら、充実した日々を過ごしていた。ただ、子を宿す事だけは叶わなかったが。

「帰蝶様。此方は如何いたしましたでしょうか？」

城で働く女の一人がそう言う。帰蝶が答えて、

「そうね、其れは、奥の間の方へ片付けて置きましょう。御願致しますわ。」

そう言う。其の指示に、女は返事をしてテキパキと行動し始めた。帰蝶は一段落が出来たことを確認して溜息を吐く。そして、城から見える良い眺めを見つつ、

「頑張つては来たし、信忠も息子として立派に育ってきてくれた。其れは良いのだけれど……。」

そう言い掛けて止まる。そう、其れ以上は呟くべきでない事だっ

だから。しかし、

「其れでも、我が子を生みたい、と言いたいのじゃな。」

突如背後からそう、声が聞こえた。帰蝶は其の声の方向に振り向く。そして、

「李さん?!何時、いらしたのですか?」

そう言った。李は答えて、

「つい先程じゃ。久しぶりじゃな、帰蝶。」

そう言った。帰蝶は李の姿を見たが、以前の記憶から見て、其の姿形はまるで変わっていないかった。腰より長い、美しい漆黒の髪、何と表現して良いか分からない、玉虫色に輝く瞳。端正な顔立ちも素敵に見えたが其れは、以前見た記憶と全く同じであった。帰蝶は暫し、そう眺めていたが、答えて、

「ええ、御久し振りですわ、李さん。」

そう言った。そして帰蝶は、李から促されてから、自分が行い始めた事柄を話し始めた。一通り話し終わり、其れに答える様に、李は、

「ふむ。御前が其の様に変わって、夫は喜んだであろう。」

そう言った。帰蝶は頷いて、

「はい。其れはもう。あの人は、私に多くを要求はしませんでした。」

勿論、私の立場を利用してしまふ部分もあつたのですから、些か思
う処もあつた事でしょう。でも、私を、愛する女として扱って下さ
っています。私は其れが、幸せなのです。」

微笑ましくそう答えていた。李は其れを見て、頷きながら、

「うむ。やはり、夫婦は其れこそが最も良き姿じゃな。だが、やは
り、「あれ」は諦めれぬか。」

そう言った。そう言われて、帰蝶はやや俯きながら、

「其れは……。今でも、出来れば良いと思います。もう、無理では
と諦め掛けてはいますが。何時も、夫に愛されてはいますが、逆に
其れが、其れ以上に応えられない私には辛いのです。」

そう言った。李は苦笑しつつ、

「やはり、「人」は無いもの強請りをする者だな。まあ、此れも「
業」と言つものか……。犯した「罪」故に苦しまねば為らぬのだな。」

そう言った。帰蝶は、言われた意味が理解出来ずに、

「あ、あの……李さん？其れは一体如何言う……？」

と、問い尋ねようとした。李は、其れに気付いて、

「あ、ああ……濟まないな。我の独り言だ。そうだな、充実してい
るとは言え、此れから又、大変な日々は続くであろう。後悔はせぬ
様に、日々を励むが良い。」

そう言った。其れに帰蝶は答えて、

「ええ。あの日以来、日々を楽しんで充実出来るように為りましたよ。此れも、李さんのお陰ですわ。」

そう笑顔で言った。李は、其れを聞きながら、其処を少し歩いてから、

「何、我は、御前に気付かせてやったに過ぎぬ。其れを当てはめて、実行するのは御前の責務だ。其れを今までやって来た事は、御主が誇るべき事なのだ。」

そう言った。やや苦笑しながら帰蝶は、

「李さんは相変わらずですわね。結局、御父様には聞けずじまいでしたけれども。でも、私も助かって居りますわ。」

そう言った。李は、帰蝶の方に向いて、

「そうか。そう、思えるのであれば、御主が「良い」方向に変わっているのだ。其れは誇るべきなのだ、帰蝶。此度も話せて楽しかったぞ。」

そう言う。帰蝶は其の物言いから、李が、「帰って」「行こう」としている事を悟る。そして、

「いいえ。此方こそ有難う御座います、李さん。貴女の「言葉」を忘れない様にして、今後も夫の為、そして夫が守るものの為に頑張っ
つていき、妻として、女として、「責務」を果たして行きますわ。」

決意を新たにそう語る。李は其の「言葉」に満足しつつ、

「頑張るが良い、帰蝶。又会えるかは約束は出来ぬが、御主の更なる「幸」を祈るとしよう。」

そう言った。其の直後、李の姿は帰蝶からは見えなくなってしまっていた。然し、帰蝶は得心して、

「やはり、李さん。貴女は「神」なのですね。どの様な方かは存じませんが……感謝致します。」

そう言い、跪いて拝んでいた。その後立ち上がると、帰蝶は、

「さて、気持ちを新たに頑張らましようか!」

そう言って、自分の仕事に励むのであった。

(本能寺の変。燃え盛る建物の中で)

「帰蝶!逃げると言ったではないか!」

信長は、怒鳴るような声でそう言う。其れに答えて、帰蝶は大きな声で、

「いいえ！私は最期まで貴方に付いて行きたく存じます。」

そう答えるのであった。信長は溜息を吐きつつ、

「御前の気持ちは痛い程分かる。だが、言わせてくれ。もし、御前が先に死ぬ時が来たとして、御前の後を儂が追うと言ったら御前は喜ぶのか？」

そう言われて、帰蝶は立ち止まる。周囲は炎に包まれようとしていた。柱は軋み始め、彼方此方が崩れ始めていた。帰蝶は、

「ず、狡ですわ……。そう言われたら、私は、逃げなければいけない為ではありませんか……。私は、貴方と……。」

そう言いかける。その時、

「やれやれ、女はこう言う時に脆くなる者だな。母であれば、我慢が出来様ものを。」

突如そう言う声が聞こえる。二人は其の声の方に振り向いた。其処には李が立っていた。帰蝶は、

「李さん?!」

そう言う。信長は其れで、帰蝶の知己であると悟る。そして、

「丁度良い。其方に頼みたい。帰蝶を連れて、人知れぬ処へ連れて行ってくれ。此れが生き残る事が儂の望みなのだ。」

そう言った。李は苦笑しつつ、

「不躰に、初めて会うにも拘らず、其の物言い。流石は信長と言う
処か。まあ、良かろう。其方そなたの頼み、確かに聞き届けよう。安心し
て逝くが良い。」

そう言い、李ももの身体が輝き始める。其れを見つつ、信長は、

「頼んだぞ。帰蝶、最期まで儂を思い、そうして、儂を喜ばせてく
れ！」

そう言い、炎の中へ駆け出して行った！

「ああああああ！！！」

帰蝶は喚く、が……、周囲の風景は見えなくなり、次第に気を失
っていった……。

本能寺では、信長と共に絶命した幾人かの部下が居たとされる。
然し、其の中に、女性の遺体は無かったとも言われる。然し、真偽
は定かでは無い。

(とある場所、ある尼寺にて)

帰蝶は目を覚ました。頬は涙で濡れており、顔や身体は煤けてい
た。漸く、自分があの場合から逃げ延びた事、李ももにより「連れ去られ
た」事を理解した。

「漸く目を覚ましたか。」

帰蝶は其の声に方向に振り向く。其処には李もせが立っていた。帰蝶は上半身を起こして、

「はい。漸く……。此処は何処でしょうか？」

そう聞いた。李もせは答えて、

「中央とは係わりの無い、田舎の尼寺の一つだ。世間とは殆ど隔絶された、寂しいかも知れないが、静かで良い処だな。」

そう言った。帰蝶は溜息を吐きつつ、

「私は……。生き続けないと為らぬのですね……。夫の気持ちを汲む為にも。」

そう言った。李もせは両手を頭の方に回してから答えて、

「別に無理に、する必要は無い。ただ、御前が「本当に」信長を「愛して」いるのであれば、奴の言葉を苦も無く行える筈だな。」

そう言った。其れに、苦笑しながら、

「確かに……。あの土壇場の場所で、私は恥ずかしくも自分の気持ちを優先していたのですね。夫婦めおとである筈なのに。あの状況では、夫は逃げられなかったでしょう。だからこそ、私を逃れさせようとした。私を思い、そして、自分の思いを遂げる為に……。其れは分かります。分かります……。。」

そう言い、再び泣いていた。
暫くそうやって泣いた後で、

「私は、頑張つて生き抜こうと思います。ひっそりと、あの人を思いながら。其れこそがあの人の気持ちに答える事に為るのでしょうか。」

帰蝶はそう言った。李^{もも}は、其れに答え、

「其れの確かな答えは、我は言えぬな。只、言える事は、「御前」がそう思っている事。其れこそが、勇んで逝つたあやつへの答えに為るであろうな。」

そう言うのであつた。帰蝶は静かに其の言葉に頷いた。其処には「確信」が満ちていた。

織田信長の妻、帰蝶。濃姫とも呼ばれた彼女には、一体どうなつたのか？夫婦仲は如何だつたのか？今の記録では分かりえない事が沢山ある。もしかすると、此の物語の様な出来事が、起こりえていたのかも知れない。いや、此れすら「神」の戯言なのかも知れない……。

只、ある尼寺で、亡くなつた夫を思い、余生を過ごしたと言う女性^性が居たと言う事実が、残るだけである……。

「人」が知り得る「事実」は僅かな事のみ。「真実」は、「神」足りえぬ為に知り得る事は無いかも知れない。其れでも、愚かにも

「人」は、探求し続けて行くのであった。己の「罪」故に。

第二話 濃姫（織田帰蝶）（後書き）

御愛読有難う御座いました。

今回の結末は、作者の私的解釈です。

実際は如何でしょうか。

其れこそ「神」のみぞ知る、でしょう。

次回は誰に何処に、そして何時、李ももが現れるのか？

皆さん、お楽しみに。

「終わり」が来る前に、「神」に気付く事が出来ます様に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7338i/>

神々の黄昏（ラグナロク）

2010年10月10日05時53分発行